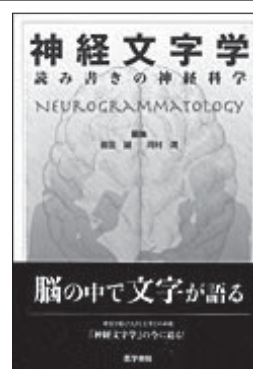


岩田 誠, 河村 満●編

『神経文字学』 読み書きの神経科学

書評者

下條 信輔 (カリフォルニア工科大教授・認知神経科学)



この本の帯には「時空を超えたヒトと文字の神秘」とある。惹句にしてもいかにも大げさな、と評者は最初思ったが、本書の中身に触れた今は「まったく同感」としか思わない。ヒトの脳と、文字という文化の間には、実にそれだけの豊かな内容が広がっているのである。

この本は、文字にかかわる神経心理学と神経科学の知見を、各テーマごとにトップの専門家を擁して編んだアンソロジーである。初学者にとって最適な入門書であるとともに、専門家や隣接分野の研究者にとっても最新のデータをいち早く参照できるハンドブックとして有用である。神経文字学という新しい分野を打ち出す上で、教科書としての決定版をめざした節もある。

中身の構成も、ある程度そうした使用法を意識している。まず編者お2人のイントロを兼ねた短い対論に続いて、序論で神経文字学の起源と背景の広がり(進化、文化、情報などの観点)を示す。そして第1章「漢字仮名問題の歴史的展開」、第2章「日本語の読み書きと漢字仮名問題」と続く。まずこのあたりまでが、大ざっぱにみて概論に当たる部分だろう。

以下が各論である。語義失語、読み

書きの半球差、読字、触覚読み、書字障害の分類、その計算モデルと神経機構といった順序で、各テーマの最先端の研究者が背景と最新知見をわかりやすく整理している。

公平にみて、この本には類書にない大きな美点がいくつもある。第1は、既に触れたことだが、文字をめぐる神経科学的問題を1つの学として統合的に考察しようという高い企図である。その多さに必要にして十分な視点と書き手が集められている。

第2に、文字という対象の性質上、その進化的、文化的、学史的背景が十分に意識され、それに紙幅が割かれている。例えば「漢字仮名問題」の学史的展開の記述から、国際学界における日本固有の研究の独自の価値を再認識させられる。

第3に、門外漢から見てこの分野のテクニカルタームは把握が難しいことも多いが、そうした概念の盛衰や用語の使い分けといった点にも配慮が行き届いている。例えば「二重神経回路説」をめぐる記述などは、編者自身がかわっていることもあって精彩に富んでいる。

第4に、文字というテーマの性質上期待される、幅広い神経機能に言及し

ている。例えば、感覚間統合や感覚運動協応、運動の計算理論、学習と可塑性などは、評者の専門である心理物理学や認知神経科学の観点からみても、大いに参考になる。今後さらなる交流が期待される。

最後に補足すると、この本は初学者へのサービス精神にも満ちている。例えば文学は好きだが神経科学はまだ素人という読者が、たまたまこの本を手にとったとしよう。彼(女)はまず、扉で引用されている谷川俊太郎の印象深い詩に目を奪われるかもしれない。それから自然に巻頭、巻末の対論を読み、「文字学こぼれ話」という囲み記事に引き込まれていくだろう。「そういう読み方もあります」とこの本の構成自体が語っているように思える。

一読して、編者であるお2人の碩学の高い志と意欲を感じ、また最先端の研究を肌で感じることができる。分野を超えて、広く若き学徒に薦めたい1冊である。

A5 頁 248 2007年 医学書院刊
定価 3,360円(本体 3,200円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00493-0]